

舞踊を主題とした松園の女性像

お茶の水女子大学大学院 本永直子

研究目的

女性で初めて文化勲章を得た近代の美人画家である上村松園(1875-1949)は、東京で活躍していた美人画家、鎗木清方(1898-1972)と並び、明治、大正、昭和を通して京都を中心に活躍した女流画家として知られている。彼女に関する研究は、美術史の観点からの研究や作品批評が中心で、これまで舞踊の観点からの研究はなされてこなかった。

本研究では草薙の指摘する松園絵画における能の影響について検討を加え、能だけに留まらない舞踊¹の影響という新しい指摘を試みる。

研究方法

以下の先行研究から『花がたみ』(1915)『焰』(1918)の制作期についての記述を考察し、実際の作品である『娘深雪』(1914)、『花がたみ』、『焰』を分析、息子である上村松篁の言葉²を参考に草薙の指摘する群像から単独像³への変化を検討する。また松園の著書⁴から芸術観を探る事によって能だけに留まらない舞踊の影響の検討を行う。

- 1) 草薙奈津子「理想の女性像を求めて 上村松園の人と作品」『新潮日本美術文庫30 上村松園』新潮社 1996年
- 2) 草薙奈津子「上村松園と画業」『生誕百二十年記念上村松園回顧展』日本テレビ放送網 1996年

①『花がたみ』『焰』の制作時期について

『花がたみ』『焰』を描いた時期、松園は女性としても画家としてもスランプの時期であった。まだ女性一人で生きていくのは困難な時代であった明治、大正、昭和初期、松園は母に子供の面倒を見てもらいながら一家の生活を背負っていた。『花がたみ』を制作していた頃、結婚を約束した相手と破談、『焰』を書き上げる年には最初の師であった鈴木年松が亡くなっている。また大正という時代を迎え画壇にも西洋文化が入り、大正ロマンティズムの風潮があらゆる文化に押し寄せていた。つまり『花がたみ』『焰』を描いたこの時期は、女性としても画家としても過渡期であったといえる。

②松園の芸術観

松園は能舞台に見られる動作、衣装、道具に至る“無駄を省いた緊張感から生まれる美”を「簡潔の美」と称し、これを能、絵画だけでなくあらゆる芸術の世界、日常生活の中においても尊い美であるとしている。⁵

③『焰』以降の松園の制作状況

『焰』以降、舞踊を主題とした作品は1935年まで描かれていない。『焰』を描いて以降、彼女の制作活動は低迷を見せている。その間松園は、まだ幼い松園が画家を目指す事を賛成し、画家として身を立ててからも仕事を続けていく上で大きな支えとなっていた母が1928年に病床に伏し、1934年に亡くなるという悲しみに見舞われている。この頃から母の姿を作品に描くかのように、京の市井の女性を絵画の主題に描き出すという新境地を開いている。

《結論》

以上の考察から、彼女の絵画は能に留まらない舞踊からの影響を受けており、『娘深雪』から試みられ『花がたみ』を経て、『焰』に確立された単独像形式の成立は、それまで松園絵画に見られた群像形式からの発展であると考えられる。この単独像形式の成立によって絵画面面に厳選された人物のシルエットと余白の間に緊張感が生まれ、彼女の描く女性たちは以前よりも緊張感を持った存在感を獲得したのである。

『焰』以降、彼女は絵画の中に「簡潔の美」を描き込む事によって、彼女の独自の美人画を確立した。これは『娘深雪』以前の画風から発展を遂げたと言い換えることが出来る。彼女が求めた女性像とは、彼女が『青眉抄』において述べる、芸術全てに共通する「簡潔の美」を備えた女性像であり、そこに描かれた女性とは、人間の姿を描く事を通して訴えかける女性の内なる強さであったと考えられる。

- 1 ここていう舞踊とは、舞を共通とする松園が主題とした舞台の事とする。
- 2 上村松篁他『画業三代の精華——上村松園・松篁・淳之展』「座談会 三代の画業を語る」毎日新聞 1997年
- 3 ここて述べる単独像形式とは、ただ人物一人を描くという意味だけでなく、道具や背景を殆ど描かず、人物を強調した構図のこととする。
- 4 上村松園『青眉抄』求龍堂 1997年
- 5 上村松園『青眉抄』求龍堂 1997年 pp. 196-198